

まえがき

一九九五年、阪神・淡路大震災直後、「ボランティア・ブーム」が起きた。それを契機にボランティアへの関心は広がったが、欧米と比較すると、参加者の割合はまだまだ低い。アメリカでは、約二五%の高校生がボランティア体験をしているが、日本では一〇%程度である。

この数年、書店には「ボランティア・コーナー」、「NGO・NPOコーナー」が登場し、ボランティア関係の書籍の刊行が増加した。その大半はハウ・トゥーものや、ボランティアの良さ、すばらしさに焦点をあてたものである。

ボランティアの認知が広がり、より多くの人々が関心を示すようになることは結構なことである。ただ、ボーダー・レス的にボランティアの枠が広がり、ほとんど「何でもあり」という風潮には懸念を感じる。

「ボランティアって何か？」を問い直し、ボランティア体験の反省面から、考えてみるというの
も必要である。本書のねらいはそうした点にある。

執筆者は四人の方にお願した。斎藤懸三さんとは、学生時代、フレンズ国際ワークキャンプ（FIWC）東海委員会で障害をもつ人たちの施設でワーク・キャンプをしていた頃、知り合った。

卒業後、障害をもつ人たちと障害をもたない人たちが共に生きる生活共同体、「わっぱ」を始めた。現在では、約一八〇人の人たちが関わる。NPO法人「わっぱの会」の理事長を務める。全国の障害をもつ人たちのネットワークづくりのみならず、ベトナム、韓国、中国の障害をもつ人たちと共に生きるグループ、団体との交流計画を進めている。

神谷さだ子さんとは「日本チェルノブイリ連帯基金」(JCF)活動を通じて、約一六年間のお付き合いである。二〇〇九年八月の北イラク視察旅行、一月のチェルノブイリ原発後遺症に苦しむベラルーシの人々との交流・調査視察ツアーで同行した。もつとも数多く、現地に足を運んだ人であり、各地の人たちに信頼され親しまれている。

原田燎太郎さんは「フレンズ国際ワークキャブ関東委員会」の仲間であり、二〇〇二年以来のお付き合いである。現在、中国の広州に在住し、中国NGO「家」(JIA)の事務局長を務める。ハンセン病快復者の支援ワークキャンプ活動を精力的に展開している。

野本三吉さんとは一九六八年、「共同体研究会」、『月刊キブツ』の集いで知り合ったと記憶している。約四二年間のお付き合いである。誠実に人々と接し、常に社会的に「困難かつ弱い立場」にある人々の側に立って考え、行動をしてきた方である。

それぞれの活動、それぞれのアンクルからの活動の振り返り、提言が少しでも参考になればと思う。

阿木幸男

序 章

〈対談〉 不況の時代の
ボランテニアを考える

野本三吉・阿木幸男

沖縄に息づくボランテニアの精神

自然と一体化した生き方

あるべきボランテニア社会とは？

第 1 章

中国・華南地方のワークキャンプ発展の前夜
——「燎原之火」・ハンセン病快復者村ワークキャンプの軌跡

原田燎太郎

はじまり——人との出会いで導かれた自分

第2章

ハンセン病国際ワークキャンプの立ち上げ	30
スラム―犯罪Ⅱリンホウの本当	46
体験が点ける燎原の火	55

チエルノブイリ 母なる大地

―医療支援活動の一九年間

神谷さだ子

「知られざる国」ベラルーシからのSOS	68
事故後遺症としての小児甲状腺がん	73
拡がる支援の輪	76
信頼できるカウンターパートの存在	83
海外支援の新たな段階	88
チエルノブイリは終わっていない―そこかしこにある被曝地	92

第3章

ボランティアと社会的協同組合

斎藤懸三

第4章

奉仕ではなくワーク……………	98
ボランティア活動で問われたこと……………	102
賃労働化する介助……………	107
進む若者の介助活動離れ……………	111
社会的協同組合、社会的企業の可能性……………	117

ライフワークとしてのボランティア

阿木幸男

ワークキャンプの原点は平和と非暴力……………	127
心の旅は続く——「プロジェクト・アメリカ一九七六」と「プロジェクト・ゲン」……………	134
脱原発活動への関わり……………	142
教育支援という平和の礎……………	147
助かる命が失われていく——ベラルーシ、イラクでの医療支援……………	154
非暴力平和維持という目標のもとに——非暴力平和隊のこと……………	162

〈対談〉ボランティアってどういうこと？

野本三吉・阿木幸男

生きる力……見る力……	170
異文化の豊かさに気づく……	180
地域に育てられる専門家……	188
関係することで信頼を得る……	193
「できない」と認めること、「自立する」ということ……	198
相性が合う、合わないということ……	200
ボランティアセンターの役割……	203
草の根的な世の中の変革へ……	205

あとがき……	209
--------	-----

序 章

対談

不況の時代のボランテニアを考える

野本三吉・阿木幸男

阿木 前回のボランティア対談からおよそ一〇年が過ぎました。野本さんは二〇〇一年に神奈川県から沖縄に移住し、沖縄大学で教えています。

二〇〇一年九月一日の「同時多発テロ事件」、同年一〇月には米軍によるアフガン攻撃、二〇〇三年三月にイラク戦争が始まり、そして二〇〇八年秋の「サブプライム・ローン崩壊」による百年に一度といわれる不況と、世界の状況はますます厳しさを増しています。日本では失業者が急増し、追いつめられた生活者の数が増えています。生きにくさを感じる人たちの叫びに似た声を耳にします。

現在の沖縄の状況そしてボランティア活動はいかがですか。

野本 百年に一度の不況といわれていますが、沖縄では戦後、一貫して不況です。二〇〇九年四月の完全失業率は本土の二倍の七・七〇%を記録しています。

日本全体の平均所得は約四〇〇万円、その半額の二〇〇万円以下の人たちは貧困層と呼ばれます。しかし、沖縄県民の平均所得は一九八万円、母子世帯は一六二万円。沖縄では半数の人たちが貧困層ということになります。

他の指標として、たとえば平均月収では本土と比較して約一〇万円の違いがあり、小学校のク

ラスでは五人に一人が就学援助を受けています。沖縄ではずっと、経済的に苦しい状況が続いていますが、本土でも二〇〇八年暮れ以降、「沖縄的な状況」が現れてきたという気がします。

沖縄ではこうした厳しい状況の中でも、なぜ、子どもを育てられるのか……。

阿木 生活が苦しいのに、それでも次世代を担う子どもを他県より多く生み、育てていることに関心があります。合計特殊出生率を見ると、全国平均が一・三七人なのに対し、沖縄では一・九人ですね。生活が苦しいと出産、子育てをあきらめる夫婦が一般的なのですが。

野本 そうなんです。沖縄では生活が苦しくても出産し、子育てをしています。本土では考えられない現象です。沖縄での生活保護申請者も急増し、八・二%に上ります。しかし申請者の約八割は審査で落とされ、一八%の申請者しか生活保護を受けられていない現状です。その背景には審査の厳しさや、福祉事務所の担当者がプライベートなことまで根掘り葉掘り聞くなど、申請者が躊躇せざるを得ない心境に追い込まれることもあるようです。

ぼくは、これまでの社会保障の考えはおかしいのではないかと、間違っているのではないかと思うようになりました。沖縄の人々の苦しい生活をつぶさに見てきて、国民に最低限の生活保障をすることが必要だと感じています。そこで「ベーシック・インカム」(Basic income)という考えに興味を持っています。

阿木 「ベーシック・インカム」とはどのような考えなのでしょう。沖縄での現状を救済するものなのでしょうか。

野本 「ベーシック・インカム」は「社会賃金」と呼ばれるもので、「児童手当」、「教育費支援」などにあたります。具体的に言えば、子どもについては一五歳まで一人七万円を、大人一人には一〇万円を全員に支給し、最低限の生活保障をするというものです。「最低限」という表現には問題があるかもしれませんが、この「ベーシック・インカム」を実施する財力は日本にあります。阿木 そうすると、「社会保障」を根本的に見直すということになりますね。これまでの「労働」の概念、会社や役所などで働いて、給与をもらうという「賃金労働」という考えを転換しなければなりません。社会の中で「働く」とはどういうことなのでしょう。

野本 これまでは賃金労働だけを労働と捉えてきました。家で子どもを育てている人たちの「子育ての仕事」は「私的な仕事」と見なされ、労働とは捉えられていませんでした。しかし、「出産・子育て」という仕事は個人的(私的)なものなのでしょうか。あるいは公的(社会的)なものなのか。よく、子どもは「社会の財産」と呼ばれます。しかし、出生率はどんどん低下し、子どもの数は減少しています。このままでいくと、七五年後の二〇八五年には、子どもの数はゼロになる計算です。

ぼくは沖縄に移住して、四五の離島を回りました。どこでも子どもがいなくなると村は活気を失い、島はつぶれていきます。たとえば大神島では、現在の人口は三五人で、子どもはゼロ。老人だけの島です。子どもがいなくなると、人々は将来の希望がなくなり、生きていく気力も失ってしまうのです。

そうした大切な「子どもを育てる」ということを個人の責任にしているのか。「子育て」は公的な仕事のはずです。国が援助し、みんなで子育てを応援していくことが重要だとぼくは考えています。「子育て」に関することは仕事であり労働です。みんなが応援していくことが必要な大事な仕事ではないでしょうか。

阿木 お互いに助け合い、支え合うという観点から見た場合、ボランティア精神はどのようにしたら、育つと思えますか。もともとボランティアは、人々に生活の上で余裕ができて、そのエネルギーと時間を他の人たちのために使う、そのことでボランティア自身はやりがい、生きがいを感じ、ボランティアされる側も満足するという関係ですね。

日本の戦後復興でボランティア活動を推進したのは、「アメリカン・フレンドズ奉仕団」（キリスト教の一派であるクエーカー教徒の平和団体）などの欧米の平和団体でした。日本にももともと近所同士で助け合う、とか「お互いさま」の精神などボランティア精神はあったのですが、「ボランティア」として意識的に行われるようになったのは戦後になってからです。

沖縄に息づくボランティアの精神

野本 沖縄にはこのボランティア精神が自然に生きています。ボランティアの原型が沖縄にはあるといえます。

日常的に当たり前のこととして、見知らぬ人から道を尋ねられたら、仕事の手を休めて道順を詳しく教えてあげたり、その場所に一緒に歩いて行ってあげることも珍しくありません。おばあちゃん、おじいちゃんが荷物を持っていたら、持ってあげる。すると、「助かったよ。ありがとう！」のことが返ってきて、手伝った人も元気になる。

こんな人間的なふれあいが沖縄のどこにでもあるんです。「ボランティア」ということばは使いませんが、これが「ボランティア精神」だと思えます。孫の子育てにおばあ、おじいが参加して、この「ボランティア精神」がしっかりと受け継がれていくのです。

子どもは「神様からの授かりもの」という考えが人々の中に生きています。おじい、おばあは生活の糧を得るため、日々、忙しい親に代わって、子どもたちのために何かをすることを生きがいを感じています。子どもたちが喜ぶのを見て、おじい、おばあも嬉しくなり、元気になるのです。そして、おじい、おばあが繰り返し、繰り返し、孫たちに語りかけることによって、沖縄の文化、価値観、歴史は継承されていくのです。

阿木 でも、グローバル経済が進み、こうした前例のない不況が長引きますと、沖縄も日本本土やアメリカの影響を受けて、昔からある文化や精神が失われていくのでは、という不安はありませんか。

野本 沖縄に来て、「手伝い」とは手を差し伸べることだということを実感しました。子どもたちは実際に手にとってやってみて、「手伝い」を学びます。

今、日本ではお年寄りの大半は、ゲート・ボールの競技者か、介護の対象としか見られていません。子育ての現場から見放されています。お年寄りが子どもたちに伝えるべき大事なものがあつたのに、関係が切断されているのです。

現在取り組んでいる『沖縄・子ども白書』の中では、お年寄りと子どもたちとの関係復活の大切さを提案したいと考えています。

自然と一体化した生き方

阿木 沖縄でのボランティア団体、グループの状況はどうですか。ボランティア活動の現状をお伺いできればと思います。

野本 本土からの影響もあつて、形としては、ボランティア活動は同じような状況になってきています。社会福祉の現場でも、「資格化」、「マニュアル化」、「業務の分業化」、「管理」が進んでいます。横浜市大時代の教え子たちの何人かは社会福祉の現場に入っていますが、みんな、疲れがたまっています。沖縄でも、社会福祉の現場では、本土のそうした現象が現れつつあります。

沖縄大学の学生たちは、困っている人がいれば自然に、当たり前のこととして、助け合うというボランティア精神が身についています。数年前、T君という耳の不自由な学生が入学してきました。ぼくはT君の面接を担当し、筆談して、合格としました。

その時点では、大学にはそれまで障害を持つ学生を受け入れた経験もなく、準備も十分ではありませんでした。障害を持つ学生へのサポート制度もなく、それでもみんなで応援すれば大丈夫だろうとは思ったものの、やはり心配でした。

そんななか、最初の授業でT君を紹介し、「T君をサポートしてもらえませんか？ 授業中、ノートをとる手助けをしたり、学内を案内したり、昼食時の移動の手伝いをしたりとかといったことですが……」と言うと、約二〇人の手が上がりました。嬉しかったですね。

沖繩の学生たち、若者たちには、困った人がいれば、当たり前のこととして助けるといふ気持ち、「ボランティア精神」があるのです。彼らにとつて、そうした手助けはあまりにも当たり前のことです。「ボランティア」として意識すらしていないのです。

それはそれでいいのですが、一方では素晴らしい沖繩文化を持っているという自覚がない、自分たちの文化とは何か？ということがわかっていないという問題があります。その無自覚は若者たちの抱える問題の一つであるとぼくは感じています。誇るべき文化を持っているという自覚があれば、自分自身に自信が生まれ、沖繩の歴史、風土、文化に誇りを持つと思うのです。

阿木 そうですね。自分のアイデンティティーを意識し、明確に自覚することは大切ですね。素晴らしい風土、文化の中に育ち、その恩恵の中で、生きているということがわかれば、生きがいも出てくるでしょう。しかし、そうした文化にプライドをもって生きるといふことが若者にとつて難しくなってきたるのでないでしょうか。

東京では元気がない若者が増えている気がします。学校教育では偏差値によって学生は評価分類され、成績が芳しくない状態が続くと「負け組」というレッテルが貼られます。元気が奪われやすい環境に若者は生きているのです。

不登校になったりすると、正規のルールから脱線したということ、**「落ちこぼれ」**と呼ばれるようになります。ちよつと、通常のルールから外れ、回り道をしているだけなのに。人生には、そうした回り道も時には必要なんですけどね。

いろいろな働き方があってもいいと思うのだけれど、フリーター、アルバイトで生活をしていると、「正規社員でなければ、将来はなし」などという声をよく耳にしたりします。仕事の現場ではますます、ミスや間違いに対してチェックが厳しくなり、おおらかさ、ゆとりが失われつつあります。働く仲間が助け合い、支え合うというより、「自己責任」、「担当領域の明確化」、「分業化」、「仲間意識の希薄化」などが社会全体に広がり、孤立感を抱く人たちが増えているようです。**野本** 沖縄でも近年、社会の都市化現象が進み、内地と同様の問題が増えています。都市を中心に「内地化」が急速に進んでいます。リゾート地などでは自然が破壊され、周辺のコミュニティでの人間関係が薄まっていく傾向、人々の心の中にも崩壊現象が現れています。

古来、人は自然と一体となって生きてきたのです。人は自然の一部です。自然環境があつて、本来人は生きるものです。自然環境の豊かさは重要なことです。自然の中で、相互反応が生まれ、人々の中に、一緒に何かをしよう、してみたいという気持ち自然に生まれてくる。「ボランティア

精神」そのものは、自然環境と相関関係にあるんです。

都会を蘇らせるのは難しいですね。都市の中にきれいな川をつくったり、農業文化を育てたり、森をつくったりするのは可能ですけど。そうした試みは「ボランティア精神」を育てることと関係してくるでしょう。

阿木 沖繩には、お互いが助け合う伝統の一つとして、「ユイマール」という言葉がありますね。沖繩の人たちと話していると、時おりそのことばを耳にします。

野本 「ユイ」は漢字では「結」。「マール」は「順番」の意味です。「持ち寄る」という意味もあります。お互いがお互いの「絆」を大切にして、助け合い、支え合い、つながっていくことです。もともと、経済的に苦しい村々で、生産が厳しく、誰かが困っているときに、みんなで助けるといふことを沖繩の人たちは昔から知っていたのです。「ユイマール」は「ボランティア精神」そのものですね。

阿木 沖繩大学での試みや最近の学生たちの様子についても聞かせてください。

野本 沖繩大学は学生同士の助け合いを重視し、「地域に開かれた大学」、「地域と共に生きる、地域から学ぶ大学」、「地域と共創する大学」を目指しています。入試では、「知識」、「成績」より「学びたい意欲」に選考基準の重点を置いています。

また、地域の住民が参加できる「土曜講座」や離島を回る「移動市民大学」を開催し、離島の

人々と交流しています。地域研究所も設置し、初代の所長は『公害問題』の編集者として有名な宇井純氏が務めていました。

あるべきボランティア社会とは？

阿木 グローバリゼーションが世界の隅々まで浸透し、アメリカ的な「能力主義」の考えが、職場、人々の日常生活の中にも浸透しつつあります。「効率化」、「合理化」が押し進められています。そうした社会の流れは、ある人たち、一部の人たちにとっては好都合かもしれません。しかし、多くの人たちにとっては生きにくい社会です。

私たちは今、どういう社会を目指しているのでしょうか。今後、ボランティアという観点から、どういうビジョンが必要なのでしょうか。社会はどうあるべきなのでしょうか。

野本 人間が生きていける保障が必要ですね。それが前提となります。人が生きていける保障は不可欠です。そうした保障なしに、ボランティアも何もできないと思うのです。

世界が貯めてきた富をどのように分配するかが重要な問題です。現在、富の分配には片寄りがあります。ある一部の裕富な人たちに所有されているという問題があります。すべての人たちが安定した生活を送れる、ということを第一前提として考えるべきでしょう。

心理学者のマズローが定義した、生きるための「生理的欲求（基本的欲求）」が満たされる社会、

「生命維持の欲求」が守られることが必要です。「生命維持の欲求」が守られなければ、「生きる意欲」も湧いてきません。何かをしたいという欲求が湧いてきません。

その次に人間が求めるのは、仲間意識が持てるような社会、お互いを信頼し合えるような社会です。やはり、その前提としては安定した生活が必要です。安心して暮らせるという保障がなければ、ボランティアも仲間意識もないと思うのです。ボランティア社会におけるすべての人にとって、こうした生活保障が必要です。そうすれば、自然とボランティアが生まれてきます。

学校教育に関しては、地域にもっと密着した教育が必要です。地域にこの学校があつてよかつたと、生徒たちや教師たちが思えることがあつてこそ、地域は活性化すると思うのです。そうした学校教育があつて、子どもたちは、身体全体で「生きる原型」を学んでいくのです。勉強さえできればいい、というものではありません。

阿木 東京では学校間の競争も始まっています。品川区で始まった小学校の選択制のように、親や子どもは入学する前に、小学校を選択するようになりました。多くの生徒を集める小学校が「良い学校」ということになっています。そのため、多くの生徒を集めるのにどうするか、学校側、教師たちもやつきになっていきます。学校の評価というものも、「成績」や「卒業後の進路」などで判定されるようになってきています。それは地域に根ざした、地域の学校という方向から懸け離れたものです。

どうも、都会では、ある一定の教育価値基準のもと、一斉に同方向に歩きだした感があります。

野本 一五〇年以上前には学校がありませんでしたが、それでも子どもは育てていたし、社会もちゃんと成立していました。学校がなければ人間が育たないなんて、ありえないことです。基本は地域なんです。地域があつて、人は生きてこられたのです。もう一度、そこに戻って考える必要があります。

その上で学校は地域に対してどのような役割を果たすべきでしょうか。学校が中心じゃないんです。地域の生活を軸に考えたらいいのです。その基本はボランティアです。お互いに支え合つて生きるということです。

ボランティア精神を基にした新しい学校の役割、カリキュラム、地域の中の学校の役割ということを考え直すことが必要です。こうしたことを沖縄の中で少しずつ、やってみたいと思つています。

(二〇〇九年六月二八日横浜にて)

第 1 章

中国・華南地方のワークキャンプ発展の前夜

——「燎原之火」・ハンセン病快復者村ワークキャンプの軌跡

原田燎太郎

枯野に火を放つ。それは燃え広がり、草原を埋め尽くす炎となる。

中国ではこれを「燎原之火」という。僕の名前の由来だ。しかしそれに反し、僕は気が弱く、運動音痴な、いじめられっ子になった。人が怖く、想いはあっても行動に移すことができない。

ところが、いい出会いに恵まれた。人との出会いの連続が、僕の道を方向づけている。現在では中国広東省広州市にあるN G O ・ J I A の代表にまつり上げられ、華南地方の五省（広東、広西、湖南、湖北、海南）にあるハンセン病快復村や小中学校において八三のワークキャンプを行っている。参加するのは主に中国の学生で、日本やその他の国や地域の人々一五三一名だ（二〇〇九年）。

僕は二〇〇二年、この活動を開始した。当時は日韓の団体三つがハンセン病快復村二か所でワークキャンプを開催し、参加するのは日本人と韓国人だけだった。

はじまり——人との出会いで導かれた自分

一九九九年、大学一年後期のある日、行動を起こせない僕に転機が訪れる。

第二外国語・ドイツ語のクラスには白根大輔という男がいた。入学した頃金色だった彼の頭は、後期からは虹色になっている。

その日、彼が僕の前の席に座った。くるりと振り返り、

「お前、夏、何してた？」

僕はそれまでとくに言葉を交わしたことがなかった。

「別に。バイトしてただけ」

「おれ、イギリスに短期留学してきたよ」

白根大輔はどことなく微笑みながら、しかし芯のしつかりした黒目で言う。

イギリス。僕には縁のない場所だ。海外に行き、そのうえ英語で話す。僕にはできない。しかしこの頃からなぜか、僕らはよく二人でいるようになった。

「お前、今日、大学行く？」

「お前が行くなら、行くかな」

「じゃ、昼に大学で」

二人とも実家から大学に通っているの、二時間ほどかけて会いに行く。会っても、お互い何話すでもなく、講堂の階段で昼飯にビールを飲んだり、タイ料理のバイキングを無言で食べた。りするだけだ。ときどき、思い出したように語り合う。

あるとき、白根大輔はイギリス留学について意外なことを言う、

「おれも最初は怖かった。でも、やっちゃえば、何とかなる。だから、お前もやってみろよ」

勧められるまま、僕はドイツに行く。二〇〇〇年二月、大学生活が二年目に入る頃の春休み、短期語学研修だ。

白いドイツ人に混じり、古い城壁の上にあるビアガーデンでビールを飲む。ヨーロッパにあらがれる僕は、自分もドイツ人になったような気分で寮に帰る。そして、手を洗い、顔を洗い、ふと目の前の鏡を見る——アジア人の顔が、僕の顔が映っている。

僕はアジアに興味を持つようになる。まず思い浮かぶのは東南アジアだ。しかし、独りで東南アジアに行くのもためらわれる。

ある日、大学の壁にポスターが貼ってあった、

「フィリピンワークキャンプ参加者募集」

フィリピン・レイテ島の貧しい漁村に三週間泊り込み、貯水タンクをつくるという。ドイツではバックパックで町から町へとビール巡りをして歩いたが、それぞれの場所に一、二日滞在するだけで、現地の人々との絡みがなかった。次にどこかに行くなら、一つの場所に長期間滞在し現地の人々と生活してみたいと思っていた。それに加えて、東南アジアであることがぴったりくる。しかし「ワークキャンプ」という聞き慣れない活動はうさんくさい。

説明会会場の立教大学に行き、会場を探してうろうろしていると、今どき珍しいノーメイクの

清楚な女の子に出くわす。彼女も説明会に行くというので、少し安心する。

説明会の内容を総合すると、ワークキャンプとは、キャンパーたち（いわゆるボランティア）が、ワークニーズのある現地にまとまった時間住み込み、現地の人々と生活をともにしながら、その人々のニーズを満たすべくプロジェクトを行う活動だ。

僕にとってはそれは、どうでもよかった。ただ、一つの場所に長く住みながら、現地の人々と深く知り合うことができることと、海辺で見る星がきれいだという言葉に惹かれ、参加することにした。

説明会の後は飲み会がある。乗り気ではなかったが、清楚な彼女も行くというので行ってみる。そこで、西尾雄志に出会った。

彼は当時、早稲田大学社会学研究科博士過程の学生で、現在は早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターの助教だ。この出会いがなければ、僕は今ここ中国にはいない。

彼は飲み会の途中、独特な存在感で現れる。

「西尾さんが来た」

皆が口々に騒ぐ。ヒゲをたくわえた彼は、何を語るでもなく飲む。

こうして二〇〇〇年、大学二年の夏、僕はフィリピンに行く。貧しい漁村と聞いていたので、スラムのような場所を想像して行くが、村人たちはのんびり暮らしている。食べているものは干物のようなものが多いが、家族や親族のきずなが強く、彼らの笑顔に接するとこちらも似たよう

な顔になってくる。

このキャンプ以来、僕は自分の家族を見直す。父と飲むようになったのはこの頃からだと思う。しかしそれつきりで、キャンプの主催団体のフレンズ国際ワークキャンプ（FIWC）関東委員会とも特にかかわらない。

ハンセン病との出会い

二〇〇一年秋。FIWC関東の集まりにも顔を出さない僕に、突然西尾雄志が電話してくる。ハンセン病快復者の森元美代治の講演会をFIWC関東が主催するので、当日のマイク回しを手伝ってほしいということだった。興味はないが、とくにやることもないので、僕はそれを手伝う。

ハンセン病を病んだ森元美代治は一四歳の夏、「らい予防法」の規定によって強制隔離され、家族から引き離された。同法は入所者の無断外出を禁じているが、彼は慶応義塾大学を卒業し、金融機関に就職。ところが、出世の呼び声がかかった矢先にハンセン病が再発し、再び療養所に入所する。二〇〇一年の熊本地裁「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟勝訴後に社会復帰した。「偏見・差別の根強い社会に多くを期待することはできない。われわれ自身が変わることで、社会が変わると信じよう」

森元美代治は実名を公表し、差別を恐れず挑戦しつづける。現在では特定非営利活動法人IED EAJ日本の理事長となっている。

フィリピン以来家族好きの僕は衝撃を受ける。家族までもが差別・偏見をもつというのは受け入れることができない。

しかし、それでも僕は、とくに何の行動も起こさない。ただただ、恐ろしい差別があることを知っただけだ。森元美代治の、ほんの少し曲がった指を見て、少し怖かった。子どもの頃聖書で読んだ「らい病」の記憶がよみがえり、いま「ハンセン病」として、僕の頭の中に刻まれる。それだけだった。

そして、就職活動の時期を迎える。大学三年、二〇〇二年の初めだ。記者志望の僕は、エントリーシート「志望動機」や「これまで力を入れてきたこと」などを書きあぐねていた。「自己分析」の本を読み、「勝ち組」の先輩と話すうち、わかってきたことがある。

僕は、人に対して、誇りを持って、「おれはここまでやった」と言い切れることを、何ひとつしてこなかった。いろいろなことに首は突っ込んできたが、何ひとつ継続していない。

そんなとき、ふと、中国のハンセン病快復村でのワークキャンプに参加しようと思う。FIWC 関東の報告書が郵送されてきていたので、FIWC 関西と韓国ピースキャンプが二〇〇一年から中国の快復村でキャンプをしているのは知っていた。が、(よくそんなところでキャンプするなつまんなそう)と思っていた。

しかし、就職活動で面接の話題を持っていない僕は、わらにもすがる想いでそれに参加する。

その背景には、子どもの頃僕がいじめられていたこともある。事実、新聞社のエントリーシートには「差別をなくす記者になりたい」と書いた。しかし、そう書き終えた後、自分がうさんくさいと思った。

(おれ自身は差別しないのか?)

ハンセン病をテーマにしたキャンプに参加したら、その答えがわかる気がする。

こうして僕は二〇〇二年二月、中国のハンセン病快復村キャンプに参加する。偶然、西尾雄志もこれに参加する。

ハンセン病国際ワークキャンプの立ち上げ

二〇〇二年二月、大学三年の終わり。初めて訪れる中国広東省広州市は、さびしい印象だ。セシスのない巨大なネオンサインがガラガラし、異常な数のバイクや車が通りを行き来し、人々は大声でしゃべりまくる。道路にはありとあらゆるゴミが投げ捨てられている。家の窓には鉄格子がはまり、二重ドアで、外側のドアは牢獄を連想させる。

広州に一晚泊まった翌朝、広東省清遠市のハンセン病快復村・ヤンカン村に向かう。高速道路を一時間ほど行き、それを下りて山道に入る。頭が車の天井にぶつかるようなデコボコ道を三〇